

---

# 午前零時のマティーン

辰巳尚来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

午前零時のマティーニ

### 【Nコード】

N6554C

### 【作者名】

辰巳尚来

### 【あらすじ】

崖っぷち29歳の女性バーテンダーの恋物語。カクテルのように綺麗な恋愛になるのか？偶然か必然か・・・おもしろおかしく恋のカクテルレシピは増えていく

## 出会いは偶然？

### 第一章 出会い？ 1

出会いは偶然かもしれない？

しかし、それが恋愛になるの必然かもしれない？

私の名前は吉沢はやみ 歳は崖つぶちの29歳！

仕事はバーテンダー！ちかごろは女性バーテンダーの事をバーテンドレスとも言っらしい？

神戸にある、バー「アスラン」と言うお店で5年お世話になってます。

現在彼氏は無し、決してイケテないとは思わないけど、仕事柄かなかねえ〜

若い頃は恋愛してないと不安になるくらいだったけど、歳を重ねる事にだんだんうっとうしく

思うようになってきた。

元来、男っばい性格でめんどくさがりなので元々恋愛は向いてないのかも？

お店には沢山の男性が来るけど、決して恋愛対象ではない気がする。

「ヨッシー！明日、梅田に買い物頼める？」

うちのマスターの達川大樹！

歳は36歳、嫁あり娘あり男前ではないけどやさしいし腕もいいバーテンダー

「いいですよ。グラスですか？」

「この前予約しのが入ったって電話あったんだけど、明日は寄り合いの日だからなあ」

「わかりました。いつもの シュール さんですよね？」

「ああ、じゃあ頼むよ」

私の職場は神戸は三宮にあります。15坪ほどのバーです。

マスターと私とバイトの男の子の3人でやっています。

夕方5時から翌2時まで！カクテルが売りのお店です。

お客様もいい方ばかりで楽しい職場です。

だからだめなのかなあ？ぬるま湯と言われればぬるま湯です。

マスターは師匠と弟子と言つより兄と妹って感じで可愛がってきます。

一人暮らしの私は食の全てはお店です。賄いが最大の栄養源！お店が終わってお腹減ってたら

マスターがご馳走してくれます。ああ〜流されてるかな？

2

いつも午前2時にお店が終わって片付けして出るのが3時すぎかな？

家に帰って寝るのが5時ごろ、起きるのが正午ごろが普通。

三十路前の女の生活じゃないよね。

今日はマスターのお使いで梅田に行くので、少し早めに準備開始！

もともと化粧化がほとんどないので準備と言っても、他の女性ほどかからない！

家を出たのが午後1時すぎ、三宮から阪急に乗る。

JRのほうが早い、阪急のほうが好き

特急に乗って30分ほど、ゆっくり出来る時間

席が空いていたので座って携帯チェック！

メールボックスにはマスターからの「おはよう」メールとお店のプ

ログコメント

両方に返信しながら時間を潰す！

停車駅の岡本をすぎて、夙川に着いた時

数人のおば様達と一緒に一人の男性が乗り込んできた。

歳の頃なら30前後だろうか？がっしりした体格だけど顔はシュツとした感じ

髪は短め、なんだかかやさしい目をしている。

私の目の席に座った彼に私は釘付けになった。

何！一目惚れ！

恋愛欠乏症のせい？

彼はおもむろにかばんから文庫本を出し読んでいた。

スーツではないのでサラリーマンではないのだろうか？

平日の昼間

電車の時間が何ともいい時間に変わった。

向かいの席で私は、人間ウォッチングにふけた。

彼の事をチャーリーと名前を付けた。

何でつて？だつて携帯ストラップにチャージャーブラウンが付いていたから！

友人の美佐にメールを打つ！

「大変！目の前にむっっちゃタイプの人が居る！ドキドキ。」

メールの返事は早かった

「おは！何々？何処に？どんな人？」

目の前のチャージャーに目をやりながらMAXメール打ち

「阪急に乗ってマスターのお使い行く途中なんだけど、夙川から乗ってきた人がいい感じ

一目惚れかも？」

美佐にあれこれメールで説明した。

「はやみが一目惚れつて久々じゃない！頑張れ！お近づきになりなよ。」

チャージャーはその間、文庫本を熱心に読んでいた。何を讀んでるのはかはカバーで見えないのが残念

電車は十三に着いた。チャージャーは降りる様子はない。あと一駅

梅田までもうのこり3分くらいしかない！

ドキドキして、焦っても何とも出来ない歯がゆさが全身を包んでい

た。

ハンカチでも落とすか？それとも貧血のふりして倒れかかってみるか？

そんな古典的な作戦が成功するのか？

思い切ってメアドでも渡すか？んん、頭爆発しそう！

何ともドキドキの時間はあつと言う間、チャーリーともお別れね。

電車は梅田に着いた。私は茶屋町口から出ないといけなのだけれど……

チャーリーは何処へ行くの？

私はチャーリーの行動を気にしながら電車を降りた。

まっすぐ紀伊国屋のある出口に向かっている。

ああ、反対方向！でも、いいっか！

チャーリーのあと後ろから着いていく

姿勢よく歩くチャーリー、何とも後姿もかっこいい

改札を抜けると、そのまま紀伊国屋に入っって行ってしまった。

さすがにそこで気がついた！



何やってんだろうあたしは！

後ろ髪を引かれる思いでチャーリーとお別れをした。

ほんの少しだけ恋愛気分を味あわせてもらった気がした。

崖っぷちの29歳！これでいいのかなあ？

浮かれすぎたかも（前書き）

店に帰ってきたはやみは、マスターたちに今日の出来事を通りかかると言われる。ブログに載せてしまったことがはたして・・・

浮かれすぎたかも

浮かれすぎた〜

人間とは本当に単純！チャーリーに出会ってから楽しくてしょうがない。

お店に帰ってきて、開店準備をしてもいつもと違う！

買ってきたばかりのグラスを拭きながら、このグラスのおかげで出会えたのよね〜と思う。

特注のマティーニグラス！

大ぶりのカクテルグラスで一個一個が微妙に違う。

うちのマスターはマティーニが上手いと評判。カクテル一回一回微妙に違うだから、グラスも

違うほうがいいよね！と言う。

チャーリーがこのグラスでマティーニとか飲んでくれた最高ののに何だか身もだえしちゃう！こんな姿誰かに見られたら恥ずかしいウフフ・・・

「何やってんの?」

「うわぁ〜!」

マスター！いつ来てたの？

「うわあ〜じゃないよ！グラス見ながらニヤニヤ身体ねじって、気持ち悪いよ！」

はずかし〜い！見られた！

「おはようございます。いつ来たんですか？」

「ちょっと前、話しかけてもニヤニヤしてるから何かにやられたかと思ってみんなで見てたよ」

みんなって？

「おはよ、ヨッシー！」

有美さん！何でいるの？

「はやみちや〜ん、何やってんの〜」

みきちちゃんまで〜！

有美さんはマスターの奥さん。とってもいい人、本当に良くしてくれます。

みきちちゃんは娘さん4つになったばかり、めっちゃくちゃ可愛い子

って説明してる場合じゃない！

「有美さんとみきちゃんまで、見てました？」

「何か悪い物でも食べたのか思ったよ。そんなにチャーリーっていい男だったの？」

ええ〜！知ってる〜！何でえ〜！

「ブログであれだけ書いたら、世界中のみんなが知ってるよ」

ああ〜、そうだ帰りの電車であまりうれしくて、ブログに書き込んだんだっただ！やばい！

「はやみちゃん、一目惚れしたのお〜？」

「みきちゃん、おはよ〜、可愛いお洋服だね。」

話をそらそうと、必死でみきちゃんとじゃれた！

「今日の営業知らんぞ〜！お客さんにかなり攻撃されるぞ〜！」

まずい！予想してなかった！浮かれすぎた！

「おはようございます。姉さん！チャーリーとどんな人ですか？」

アルバイトの前田くん！入ってくるなりいきなりかよ〜！

「うるさいよ小僧！」

現状では彼だけが年下！ある意味救いかも？

「ヨッシーが一目惚れねえ、女性の部分が残っててよかったよ」

「本当に!」

マスター、有美さん、ちょっと言う事ですか？マスターと有美さんが悪い目でこっちを見ている。ええ、みきちちゃんまで!って前田!お前もか!

「みき、はやみちゃんは恋してんるんだって。」

「えっ、コ・イ??.?」

「はやみちゃん、コイしてるの??.?」

やめて!みきちちゃんまで!

こりゃ、今日の営業はかなりいじられるなァ、もう、帰りたい

ゆるっ〜

ゆるしてえ〜

何だか営業前に疲れてしまった感じ！

「前ちゃん、看板よろしく！」

「ハイ！」

マスターがオープンの合図を出した。

「うわぁ〜！」

扉を開けようとした前田くんを押しつけて、お客さんが入ってきた。

「ちょっと！ヨッシー！チャーリーって何だよ！」

ええ〜、いきなり〜！

「いらっしやい、西さん」

「マスターはいいから！ヨッシーどう言う事」

ちよつと落ち着いて。常連さんの西さん、宝石屋さんで歳は45歳  
ほぼ毎日やってくる。

「西さん落ち着いて、お水でも飲みますか？」

「水？水はいらない！ビール、ビール頂戴！」

最初からこれは先が思いやられるなあ？

「ブログ読んだよ！一目惚れってどう言う事？説明して」

説明しろって言われても・・・私はブログに何書いたんだらう？

「いらっしやいませ」

マスターの声に反応すると、目の前に座ってる西さんと同じような勢いで、これまた常連さんの川端さんが入ってきた！

「ヨッシー！何だよあのブログは！」

いやいや、みなさん落ち着いて。あくまで一目惚れです。結婚するって言った訳ではないので。

「毎度、川端君。あんたもか？」

「どうも、西さんもですか？」

いったい何人来るんだよ！怖い。

「いやいや、ただいい男見て、いいなあと思っただけですよ」

「マスター！マティーニ！」

川端さんの勢いにマスターも押され気味でミキシンググラスに手を



伸ばした。

「どんな男なの？」

「いや、何と云うか・・・がっちりしててえ・・・シュツとした感じであ・・・背も私より高くて・・・やさしい目してるの」

説明してもまったく納得しようなどと思っただけの2人！

「で、携帯ストラップがチャーリーブラウンだったからチャーリーってか？」

ハイ！その通りです。あんちよこでごめんなさい。

助けて！マスター！

「まあ、ヨッシーも女だったて事だよ」

「マスター！ヨッシーは女だよ！俺らはずっと思ってるで！」

「え！そうなの？」

「確かに化粧もしないし、飯もよく食うし。大酒は飲むけど・・・」

「いやいや、ちょっと待って！」

「それでも、ヨッシーのファンなんだよ！」

「いやいや、それって」

「俺達の男心をもてあそぶなんて！」

いやいや、もてあそんでないし！

横でニヤニヤしている前田くんがめっちゃむかついた！

こんな調子で5時のオープンから常連客がひっきりなしにやってくる。

聞かれる事は同じ事！自分ら今まで私を女として見てなかったくせに！

「もう、シヨックや！今日は飲んでやる！おかわり、ギムレット頂戴！」

うちの常連客では若い方の高島くんが何故だか失恋モード！

「しかしながら、隠れヨツシーファンがこんなにいたとわな」

杉田さんがポツリとつぶやいた。

「杉さん、ヨツシーは人気あるねんで。背も高いし、顔もええし美人やで！」

高島、なかなかいい事言うじゃない。

「マスター、ヨツシーやめちゃうんですか？」

おいおい

「高島くん、飛躍しすぎや！高々一目惚れやないか。付き合ったとか言っんやったら話はわかるけど、チャーリーはどこ誰かもわかれへんねんぞ」

マスターの言う通り！ただの一目惚れ、みな騒ぎすぎ！落ち着いてよ。

「いらっしやませ」

扉が開いて入ってきたのは・・・げげえ〜！うちのディープな姉御達！かおりさんと由真さん

2人ともがつつり負け組み35歳独身！犬あり

「ちょっと！はやみ、しっかり話し聞いわよ！」

時間は午後9時、今日は長くなりそう？

## 大反響

大反響

姉御達の猛攻は止まらなかった。

「で、何とかしようとしたの？」

「いや……。」

「いや〜じゃないでしょ！ハンカチ落とすとか、貧血のふりして倒れるとか？」

「やばあ、発想が一緒！私は負け組み？」

「古っ！貧血って？」

横から高島くんがちゃちゃいれた。

「うるさい！高島！」

かおり姉の一括に高島くんはシュンとなった。

「まったくせっかくのチャンスを逃して！明日も同じ時間に阪急に乗りなさい！」

あっ！そっか。その手があったか。さすがかおり姉！

「その負け組み二人！人の事言ってる場合か？」

マスターの言葉に姉御達の猛反撃が始まった！

「マスター！何て〜！」

かおり姉が凄む！

「はやみの成功は私達に未来をもたらすかもしれないんで」

由真姉が訳分らん事を言う

「コンパでも開いてもらおう気か？」

マスターが姉御をいじりだし、事態は変わるかと思っただが・・・

「はやみ！！！！」

いきなり扉が開いて大声で清川さんが入っていた！

「おお、カズ！久しぶり。」

「大ちゃん、今日はお前はええんや！」

清川和博、マスターのお友達でプロ野球選手。あっ！そうそう、マスターは元高校球児で甲子園の優勝投手。だから野球選手がお客さんが多い

「なんや！あのブログは、何処のどいつや！そのチャーリーってやつは！」

あゝ、この人までえゝ

「清川さん、落ち着いて。ただの一目惚れだから!」

横にいたかおり姉が答えた。

「そうです。ただの一目惚れですから!」

何!私は以外と人気ものだったの?

「ほんでもなあ、このはやみがあそこまで浮かれたブログ書くつちゆう事はやなあ、今回はちよつと違うちゆう事やる!」

周りの全員がうなずいてる!

「かずちゃん、お前関係ないやろ?」

マスターの言う通り!

「大ちゃん!それはないで、お前と俺は親友や、その親友の弟子の一大事やぞ!黙ってられるか!お前の弟子は俺の弟子も同然や!ちゆうか?」

違ふと思います。私野球やってませんゝ!

「そつやなあ」

ええゝマスター……

「はやみ説明してみ！」

もう、頭混乱！今日はいったい何回説明したことか？

私の説明より周りの人たちが説明してくれた。お店全員が何だかの一体感で話が進んでゆく。

20席のお店が一体何回転しただろう？いつもは11時までの前田くんも今日は残業！

マスターがおもむろにすすめが書かれた黒板を手にとって書き直し始めた。

前田くんがそれを覗き込んで笑ってる！何書いてるの？

「これでええか！」

何！ ちょっと何書いてるのよ

チャーリーの特徴！

髪は短め！ ガッチリしててえ〜！ 背は私より高くてえ〜（ヨッシーは167cm）目がやさしい感じでえ〜、携帯ストラップがチャーリーブラウン

「これで、みんなわかるやろ！なあ、ヨッシー」

私はマスターも敵だとしてここで認識した。

ただそれ以降に来たお客さんには説明が楽になった！

結局、お店が終わったのは3時をまわっていた！

「お疲れ！」

「お疲れ様です。」

「しかし、ブログの効果と云うか、ヨッシーの人気の高さと言うか。お店としては万々歳やなあ。明日もあるでこれは？」

もう結構！かなり懲りました。しかしながら、ブログ恐るべしです。

「どうする？一杯やってかえるか？」

とてもそんな体力気力が無いです。それに飲みに行ってまた、聞かれるのもいやだし。

「やめときます」

「そっか、じゃあ早めに帰れよ」

何とも私の一目惚れは大騒動になってしまった。明日は普通になりますように。



## ただの一目惚れ

ただの一目惚れ

昨日の疲れがたっぷり溜まったままの状態での出勤！まったくあのウキウキした感覚は何処へいったのでしょうか？

起きてからブログを覗くと驚くほどのコメントが入っていた。

日ごろは一人一人にお返事かくのですが、さすがに書けない状態でした。

それにしても凄い反響に驚いている反面、何だか自分が主役になった気がして優越感もあるかなあ。

「そっか、それであの黒板ね」

お酒のメーカーの石井さんが笑った。

「ひどいでしょう。マスターはお客様と一緒にになってイジメるんですよ。」

マスターが昨日書いた黒板の“チャーリーの特徴”がやけに目だつてる。

「でも、吉沢さんの人気があればこそなんじゃないの？」

「またまた、そんな人気無いですよ。ただイジメてるだけですよ。」  
確かに、うちのお客様はマスター目当て！前に言いましたけど、元  
甲子園優勝投手！一年生でエース、当時はかなりのアイドルだった  
みたいですよ？

残念ながら肩を壊して野球を断念した。一度地獄を見て這い上がっ  
てきた人の話には説得力がある。だから決して男前ではないけどマ  
スターは人気がある。

そのマスターに目もくれず昨日は私に集中した事は悪い気はしなか  
った。

時間は7時。いつもの早がけのお客様に散々いじられる。

「ヨッシーにも彼氏が出来たかあ、めでたいめでたい！シャンパ  
ンで乾杯しようか？」

「南さん、彼氏じゃないですよ！一目惚れだつて。」

「何言うてんの、ここに来て5年だっけ？今まで一度もそんな話な  
かったやんか。何にせよ、めでたいめでたい！」

南さんデザイン事務所の社長さんで、私を可愛がってくれるおじ様  
です。

「大樹！シャンパン開けてや」

「いいんですか？」

「ええって、わしはヨッシーのファンやからな。めでたい時はシャ

ンパンや！」

南さんの気持ちを含んで頂いた。何だか昨日今日と何とも言えないお店に一体感がある。

カウンターを中心に笑い声が絶えなく、小気味良いシェーキングの音が響いてる。

バーのある風景って感じが心地よかった。

昨日に比べると突っ込まれる事に慣れたのか、まるでドラマのヒロインの様に喋れる様になってきた。

10時まわった頃、美佐がやって来た！

「それで、どんな男なん？まあ、はやみがそこまで言うやから福山くんみたいは顔やな？」

「鋭いね、やさしい感じの人やったんよ」

顔は福山くんみたい・・・

「で、マスター！黒板書かなくていいですから！」

油断も隙も無い！マスターが黒板に書こうとしていた。

「何、あの看板？つけるね。」

「つけてる場合じゃないよ！マスターも一緒になってイジめるんだ

から。」

「それにしても、チャーリーってのはどうなん？」

「だってえ、ストラップが可愛いつて思っちゃったんだもん」

「何、可愛こつぶってんのよ！4年も彼氏が居ない女が！」

あつ！言いやがった。確かに4年間の長きに渡り彼氏なんてものは居ませんよ。」

て言うか、あんたも同じなんじゃないかなあ。

「えっ！姉さん4年も彼氏がおらんのですか？」

前田くんが食いついてきた！

「悪い！この女も一緒よ！」

「えっ！美佐さんですか？」

いちいち驚くなこの小僧！

「あんたと一緒にされたら困るわ〜！」

何、この上から視線は？

「あら、美佐は違うのかしら？」

「はやみみに日照り続きでは無いってことかな」

「知らなかったなあ、そんなにおもてになってるなんて聞いた事がなかったから」

「いちいち言う事でもないかなあ、って思ってたねえ」

引かない女だね。確かにに目ぱっちりで可愛いいわよ！それにあたりと違って胸も大きいしね。」

「その崖つぶち二人！虚しくなくなるからやめなさい！」

マスターの仲裁が入った！

「は、い。」

美佐はマスターの言う事は結構素直に聞く。だって、美佐はマスターの事が大好きだから！

私が気づいてないと思ってる哀れな女だ。

私の一目惚れをどうこう言う前に、美佐はマスターに一目惚れしてここに通ってるのだ！そして私は美佐の紹介でこの店にお世話になってる。

「で、何処の誰かもわからへんの？」

「残念ながら・・・」

「平日の昼間に夙川から乗ってきたでしょ、そのあたりに住んでる可能性が高いね」

「やっぱり夙川で張り込つかなあ？」

「有りちゃ有りだけど、一つ間違えたらストーカーよ！」

確かに、ああ、あの時にもっと何とかしとけばよかった！

今さらながら本当にただの一目惚れだよね。

## 奇跡の予感

### 奇跡の予兆

11時もまわると電車で帰られるお客様がバタバタと席を立つのが普通だけど、今日は金曜日。いつもよりも動きがゆっくり。

美佐や高島君をはじめとする常連さんが5組ほど残ってる。その他のお客さんが2組の11名が週末のバータイムを楽しんでいた。

「だいたい、ヨッシーも美佐ちゃんも何で彼氏がないの？」

高島君がけっこういい感じで酔って絡んできた。

「居ないといけなくて事はないやんか？」

美佐の言う通り！私達は今は仕事が彼氏みたいなものやからね。

「でもやゝ、二人とも結構綺麗やと思うんやけどな。俺やったら完璧OKやのに」

「あんたがOKでもあたしらはNOやわ！」

美佐って結構気が強い！だから彼氏が居ないんじゃないかと思う。まあ、私も変わらんけどな、

「きついなあゝ美佐ちゃんは！マスター助けて。」

「飲め！高島。この辺にはまだまだお前では太刀打ちできんわ」

マスターは高島君を慰めながらこっちに来た。

「でも、ヨツシーはともかく美佐ちゃんは本当にいないんか？」

ちよっとマスター！と言う意味ですか！

「居ないですよ。本当に！」

わかりやすう。今までどエス満開の目で高橋君見てたのに、何、頬赤らめてるかなあ

「じゃあ、俺と付き合ってもおっかなあ？」

やばいんじゃないですか、マスター！冗談じゃすまなくなりますよ。

「ええ、どうしよっかなあ、マスター奥さんいるしなあ。」

げげえ、そんな声だすんや。もったいぶって。超うれしくせにこの女！

「ああ、マスターずるいわ！口説いてるやんか」

高島のちゃちゃに美佐の目が変わった。おおこわっ！

「まあ、美佐ちゃんもヨツシーも俺ら常連のアイドルやからなあ」

今日はめずらしく遅くまでいる西さんが話しに入ってきた。



「おもろい店やる？」

お連れさんの男性に西さんが聞いた。

「本当に、店の雰囲気もいいし、カクテルも美味しいし、会話も面白いですわ」

西さんのお店を新しくデザインするデザイナーさんの森川さんと言う方で落ち着いた50代の紳士。野球がお好きみたいでマスターと盛り上がっていた。

「あっそうや！西さん！うちの若いの呼んでもええですか？」

「おお、近くに居るんやっただ呼んだりや。」

森川さんは携帯で誰かを呼んでいた。

「うちのホープなんですけど、元高校球児ですわ。無類のマティーニ好きなんです。飲食店のデザインやらしてますねんけど、ここは勉強になりますわきつと！」

うちのお店はオーセンティックな木目を基調にしたデザイン。マスターのデザインなのだ。

時間はもうすぐ午前零時！

今度こそ

今度こそ

午前零時を目前にして店内は何となくゆったりした時間が流れていた。

「いらっしまいま・・・せ」

扉を開けて入ってきたのは・・・

「おお、村田！こつちこつち。」

森川さんが手招きをした。

「悪いな、急に呼び出して！」

「いえ、近くに居ましたから」

森川さんは西さんとマスターを紹介していた。

店内のお客様のほとんどが入ってきてからの彼に釘づけになっていた。

「マスター！マティーニおねがいします。」

マスターはミキシンググラスをすばやく冷やし、オレンジビターズを振りかけ

キンキンに冷えたビフィータージンを注ぎ、ノイリープラットをバースプーンを使って

2滴落とした。

そしてゆっくりステアをし、グラスにまさに糸を引く様に注がれる。最後にレモンピールを振りかけて完成！

「すばらしいですね。まさに芸術ですね」

「このマスターはええ腕してるから、お前呼んだんや。どないや？」

「いや、美味しいです。それに雰囲気も最高ですね」

村田と言う彼はマティーニを美味しそうに飲みながら西さん達と話をしていた。

「はやみ、ちよっと」

美佐が小声で私を呼んだ

「めっちゃ男前やん！チャーリーもあんな感じ？」

美佐との会話に高島くんが聞き耳立てている

「もっと好青年って感じかなあ？」

確かに、ハツつとするぐらいの男前の村田さん！

「村田君はそれにしても男前やねえ、うらやましいわ」

「マスター、お世辞はやめてくださいよ」

「こいつめっちゃくちやモテよるでえ、クラブとが行ったら独り占めやで！」

「社長、やめてくださいよ。モテないですよ！言うほど」

美佐の視線は村田さんに釘づけになっていた。

「さつきから気になってるんですけど、この黒板何ですか？」

やば、見つかった！

西さんが笑いながら説明し、視線が私に向かってきた。

「それはおもしろい！綺麗な方ですね。僕が彼女に一目惚れしそうです。」

うまい！すばらしい社交辞令！

「みんながイジメるんですよ。まったく！」

「僕の友人でこんなタイプの奴がいますから、今度連れてきますよ。」

「案外、それがチャーリーだったりして・・・」

高島くんのチャチャにみんなが笑った

「まさかね」

村田さんは一瞬にしてみんなの人気者になり、店は楽しい雰囲気  
包まれた。

ただ一つ、美佐の視線を除いては！

## 偶然は偶然

偶然は偶然

怒涛の何日かはすぎ、少しは沈静化した様な？相変わらず常連さんたちの酒の肴にはなってるけど！

今日はセミナーで梅田に向かっています。淡い期待を胸に阪急に乗ったけど、そんなにつまくは行かず、夙川でチャーターは乗ってこず。電車でキョロキョロしながら探すも梅田に到着！

「ヨッシー！」

「智さん、おはようございます。」

三竹智美さん、うちのマスターのお弟子さん！歳は31歳。私の姉弟子。

「一緒に電車やったんやね、セミナーやる？」

「はい！」

ツカジエン又って感じの美人できりつとした三竹さん。憧れの女性バーテンダー

「マスターは？」

「地元も商店街の集まりがあるんでこれないって言っていました。」

「菊さん達のやつ?」

「そうです」

智さんと会場に向かいながら、あれやこれやと話をし、当然チャリーの話も出て少し愚痴ってみたりした。

「でも、ヨッシーはそれだけお客さんに認められてるって事なんぢやうかなあ?」

「そうですか?」

「でなきゃそんなにお客さんが来てくれへんよ!うちでも何人か話しに来てたよ」

「すみません。迷惑かけて!」

「全然、可愛い妹弟子の話で迷惑なんてないよ」

いつもやさしい智さんです。

セミナーは午後1時半から3時半まで!試飲しながらウイスキーのブレンダーが講義をする。

関西の色んなバーテンダーが参加している。米搗きバッタの様に先輩達に挨拶をする。

「ヨッシーどじするの?」

「私は帰ります。智さんは?」

「新地に寄ろっかなあと思ってるけど」

「いいですね。あまり飲みすぎなでくださいね」

智さんと別れて駅に向かいながら、ウィンドウショッピングを楽しんだ。

「吉沢さん?」

振り返ると村田さんがいた。

「村田さん!どうしたんですか?」

「よかった、間違ってたらどっしよつと思いながら声かけたんです。」

村田さんは打ち合わせで梅田に来ていたみたい。

「お茶でもしませんか?」

ちょうど喉も渴いていたので、OKした。

「へえーお酒のセミナーですか?勉強してるんですね」

「村田さんもお忙しそうですね」



「私は飲食店のデザインなんで、数こなさなとダメなんです。」

お互い、仕事の話をして時間を過した。

村田さんは本当にいい人でした。喋りも上手いし男前！歳は30歳だそうです。

お酒が好きらしく、色んなバーにも行ってるみたいで詳しくかった。

「何処まで帰られるんですか？」

「芦屋です。事務所が駅の近くにあるんです。」

そのまま二人で阪急で帰ることに、電車の中もお酒の事や、お店の内装について話した。

20分ほどだったけど、楽しい時間を過せた。

「近いうちにまた、寄らせてもらいます。マスターのマティーニは絶品でしたから」

「お待ちしています。ソルティドックも美味しいので是非！」

さわやかに手を振って電車を降りた村田さん、最近梅田に出る時は何だか男運がある気がした。

今日のことはブログに書かないと堅く誓う29歳でした。

## 予感

予感

午後9時、いつもの様にお店には常連さんで賑わい、楽しい時間が流れていた。

「ヨッシー、ギムレット頂戴！」

「あら、めずらしいね高島くん！」

「だって、黒板におすすめで書いてあるから！」

例の黒板はマスターが今日から元に戻してくれた。

さすがにあれから10日もたって、何も進展が無いのでそろそろ飽きていた。

「ヨッシーの一目惚れ騒動はほんまに一目惚れで終わったなあ」

川端さんがしみじみ言つのを聞いて何だか淋しくなった。

午後10時を回ったころ村田さんがやってきた。

「いらっしやませ」

「この前はどうも、じゃあ言ってたソルティドックもらおうかな」

マスターにオーダーを伝え私はグレープフルーツを搾り始めた。

うちのソルティードックは一味違う。塩の付け方しかりグレープフルーツの搾り方しかり、

コレだけを飲み来るお客様は多い！自慢の一杯です。

「お食事は済みますか？」

「今まで食事しながらの打ち合わせで、ようやく開放されたところです。」

「お疲れ様です。」

マスターのやわらかいスナップシェイクのリズムが店内に響いていた。

「お待たせしました。」

村田さんは飲むなり目を見開いて言った。

「うまつ！何ですかこれ？」

「ソルティードックです！」

「いやいや、わかってますよ！でもこんなすソルティードック飲んだこと無いです」

「すごいでしょ！マスターにしか出来ません。私はまだ無理です。」

「

マスターのソルティードックは確かに違う、シェーキングの妙が一杯を生むって感じかな？

私も5年になるけど、まだただここまでの物は出来ない。マスターに聞いても

愛情の差だね！と言う。

「いや〜感動です。この前のマティーニも美味しかったけど、これも最高です。マスターって天才ですね。」

それ以上言わないで！結構調子に乗るタイプだから！

「村田くん、天才なんて言葉で片付けないでくれるかなあ、神が嫉妬する腕と呼んで欲しいね」

あ〜あ、始った！ホント調子に乗るのがマスターの悪い癖！

「マスター面白いですね。」

「この人ああ見えて結構お笑い系だから気をつけてくださいね」

高島くんの言葉に大きくうなずく村田さんでした。

「ここは面白い店ですね！」

そこに美佐がやって来た！

「おつかれ！マスターウォッカリッキー！」

入るなり注文した美佐は村田さんを見つけて、目ざとく隣に座った！

「あっ、どうも」

「どうも」

あっ！じゃないよ。入るなりちゃんとロックオンしてたくせに！

「美佐ちゃんが隣に座ってくれるなんて感激。」

反対側の高島くんが空気読まずに言った。

「あら、居たの？相変わらず他に行くところないの？」

一揆にへこむ高島くん！それをフォローする川端さん。いつもの光景だ。

「あとで連れが来るんですがいいですか？」

「全然かまいませんよ。喜んで！女性ですか？」

「いえいえ、男友達です。あの黒板に書いてた内容に当てはまる奴です。」

マスターがおもむろに黒板を掛けなおした！

ええ、あの看板が、なんで、

「一応残しときました。掛け変えで対応しようと思って。へへへ！」

何なの。このマスター！

「ナイスやなマスター！」

川端さんが拍手した。

「みんなで復唱しときますか？」

高島！この野郎！いらん事言うな！

それから15分ほどして、待ち人がやってきた！

店には高島さんに川端さん、杉さんそして美佐に村田さん！

「健太！こっちこっち！」

店に入って来たのは……

いらっしやいませと言うおうつとして開けた口が閉じなかった！

彼が席に付く間、お店に居た全員が口をそろえて言った！

髪は短めで〜！

ガツチリしててえ〜！

背は私より高くてえ〜！

目がやさしい感じでえ〜！

席に着いた時、みんなの目が一斉に携帯に行った！

そして

携帯ストラップがチャーリーブ라운！

「ええ〜〜！チャーリー！」

全員の合唱に彼はびっくりしていた！

ま〜じ〜で〜！こねってき〜せ〜き〜！

私の心臓が口から出るかと思つくらいいドキドキしていた。

現実なの？

現実なの？

お店の全員が口を開けて彼を見ていた。

まさかの偶然！これぞ奇跡！私は倒れそうなくらいのドキドキしていた。

「まさか、ビンゴなんですか？」

村田さん、ビンゴです。的中！大当たり！盆と正月が一緒に来た！鴨がネギ背負って来た？

いやいや、どう言っているのかわからない！パニックです！

「ヨッシー！彼なんか？チャーリーって？」

マスターの問いかけにうなずく事しか出来ませんでした。

「これはサプライズや！ビックニュースや！」

高島くんが携帯でメールを打ち出した！

やめて〜！話を大きくしないで〜！

彼はまったく状況が把握できずに困惑している様子に村田さんが説明をはじめた！



「確かに、その日のその時間が阪急に乗って紀伊国屋に行きました。」

何ともやさしい声でチャーリーが答えた。

あまりの事態にオーダーも聞いてなかったのにマスターが気づいて私に聞く様に促した。

「あ、あの〜、いかがいたしましたでしょうか……」

ドキドキが止まらない！やばい！

「健太、こちらが吉沢はやみさん。吉沢さん、彼が山下健太です。僕の高校からの親友です。」

「よ、よろしくお願いします。」

顔があげれない！

「タリスカアのハイボールください。」

マスターが私に作る様に促した。

手が震えてる、はずかしい。

「あれ、ヨッシー震えてんの？マジやなあこれは……」

川端さん、今はそつとしいてえ〜

必死でハイボールを作った。こんなに苦労したのは、はじめて作らしてもらった時以来かもしれない。

その間、村田さんとマスターが今までの話をチャーリーいや、山下さんに説明していた。

「おまたせしました。」

「震えとる震えてる！」

もお！川端さん！いじめないで〜！

「ヨッシー、喋ったら？」

マスターに押されて山下さんの前に立たされた。

美佐がマスターを呼んでこそこそ内緒話している。気になる〜。

「おいしいです。これ！」

山下さんがグラスを持ち上げてニコって笑ってくれた。

一瞬クラッってした。これは恋ね確実に恋なんだわ〜！

「ありがとうございます。山下さんは夙川にお住まいなんですか？」

「実家が苦樂園なんです。休みで実家に寄ってた時ですね、あの時は」

山下さんは輸入家具のお仕事をしていて、岡本にお店をもっていて、家も岡本に一人で住んでいるとの事でした。

「健太、うらやしいなあ、こんな美人に一目惚れされるなんて」

もお、村田さんたらお世辞言っちゃって！何だか夢見たい。

「チャーリー来たってつか？」

杉さんが慌てて入って来た！高島の野郎！

「杉さん落ち着いて！」

マスターがそう言うと山下さんの方を促した。

「ハイ、チャーリー」

お前はチャーリーズエンジェルか？

「すみません、山下さん。」

いえいえとばかりに山下さんは手を小さく左右に振った。可愛い！

その後続々と常連さんがやって来た！高島の野郎は一体何人にメルしたのか？

来る人来る人がチャーリーチャーリーと言う会話！山下さんはちょっと困惑気味！

「おもしろい店やる？健太」

「あ、うん」

「本当にすいません」

私は謝る事しか出来ませんでした。

「じゃあ、最後にマティーニください。お前も飲めよ！」

「ああ！」

時間は午前零時！満席のお店のなかで一箇所だけ光り輝いた！

## お近づき

お近づき

お店にいる人達全員の視線が私達に注がれていた。

マスターが耳元で メアド と言って通り過ぎた。

確かに、こんな奇跡が起きたのに、これで終わる訳にはいかなかない。せめてメアドだけでもゲットしなくては！

しかし、どうやって切り出すか？誰かヘルプ！

「どうや、美味しいやろ？」

村田さんの言葉にチャーリーはうなずいた。

「マティーニ好きですか？」

「こいつに教えられて、好きになりました。」

もつと話さなきゃ！

「バーテンダー競技大会でも課題カクテルはマティーニなんですよ」

「へえ、そうなんですか？出られたりするんですか？」

「あつ、ハイ！この秋に神戸の予選があるんです。ただ今特訓中で

す。」

前田くんが大会のチラシを持ってきて、彼らに差し出した。ナイスアシスト！

「見てみたいなあ。」

「是非、いらしてください。結構まじめな大会ですが、面白いと思いますよ。」

「ヨッシーの応援に来てってください。優勝目指してますから！」  
マスターもナイスアシスト！

「ブログとメールで色々とヨッシーの練習報告とか見れますよ。ここにいるみんなが見ています。」

「ナイス！高島くん。もっとアシストして！」

「ブログやメールですか？色々やってるんですね」

村田さんが關心していた。

「メアド言つときですか、僕にも情報くれますか？大会って凄く興味あるんで！」

ゴ~~~~ル！ありがとうみんな！チャーリーのゴールネットを揺らしたわ。

「では、赤外線通信で・・・」

マスターじゃないでしょう！おもいつきり睨んだ。

「うそうそ、ヨッシーとお願いします。」

もう！この人達は本当に！

「では、僕が送ります。いいですか？」

いいですよ、いいですよ、どんどん送っちゃってください。

「あっ、着ました！じゃあ、私の送ります。」

何だか幸せ。

「僕もいいですか？」

村田さんが携帯を出した。よろこんで！

「村田さん、私もメアド交換してください。」

来た！美佐が参入！やっぱり村田さん狙いだっただのね。

店内は美男子に二人に群がるハイエナ達を冷静に見ていた感じ。

「どんなカクテル出すんですか？」

「今、一生懸命煮詰めてるところです。ネーミングが決まらなくて・  
・」

確かに、一目惚れだと騒いでる場合ではなかった。2週間後にはレシピの締め切りが迫っていた。

大会のあれやこれやと話をして結構盛り上がってしまった。美佐は村田さんを一生懸命、毒牙に掛けようとしていた。

チャーリーはすごく本が好きな様子。今度一緒に本屋めぐりをする事になった。

ラッキー！何と無くお近づきになれた気がした。

楽しい時間はあっと言つ間に過ぎて。

「では、そろそろ帰ります。」

村田さんの無情の言葉に淋しさがこみ上げた。

「ありがとうございます。」

お見送りに出た私はまじまじと二人を見た。

「また、いらしてくださいね。」

「また、寄ります。メールくださいね。」

しますします。じゃんじゃんしちゃいます。

おじきをして二人の姿が見えなくなるまで見送った。



## メール送信

メール送信

お店が終わっても、まだ夢心地でいた。

片付けが終わって、着替えた時に携帯が鳴った！

きた〜！メール！すごい！

って、美佐かよ！

「おつかれ、チャーリー登場でびっくり！でも良かったじゃん。メールもゲットしたし・・・必ず会う約束しなさいよ！ちなみに私も村田さんとデートの約束取り付けました。きやつ！」

何だそりよや！いい思いしてんなあ〜油断ならないねえ〜美佐は！  
適当に返信した。そんなメールに付き合ってる暇はなかった。いち早くチャーリーに送らなければ！時間が無くなる。

いや、待てよ。こんな時間はさすがに失礼かも？すぐって言うのもがつついてる感じるなあ。やっぱり文面をよく考えて明日のお昼くらいに打つのがいいかも？

でも、禅話急げと言う言葉もある事だし。ん〜悩むなあ。

その時またもメールが・・・

ぎゃあ〜！チャーリーから！

ドキドキ、携帯もつ手が震える〜。

「早速メールしました。今日はありがとうございました。すごく楽しい時間でした。カクテルも最高でした。また、寄らせてもらいます。では、お休みなさい。」

うひょ〜お！感激！向こうからメールが来るなんて。

でも、何か儀礼的？ちよつとシヨック！こんなもんかなあ？

返信の内容を考えようとするけど文面が浮かばない？

あんまり好き好きメールは引かれるとこまるしなあ、淡々としても営業メールだと思われてもいやだしなあ。

メールって難しいなあ〜

「こちらこそ、変な感じですね。また、是非お越しく下さい。マスター共々お待ちしております。」

って堅いかなあ？

「ありがとうございます。楽しい時間が過ぎて最高でした。また来てくださいね。それと本屋巡りの方も是非是非！大会に応援に来てくれたりしたらうれしいです。」

今度は私のマティーニ飲んでくださいね。では、おやすみなさい。また。メールします。」

どう？こんなもんかな？

ん〜送信しちゃうぞ〜！

送信しちゃった！

どんな返信が来るのか？楽しみ楽しみ。

返信キタ〜！

「こちらこそ本屋巡り行きましょう。色々おすすめしたいですし、明日仕事のスケジュール確認してメールします。日曜がベストですよ。昼のランチぐらいならOKですか？」

よっしゃ〜！ランチなんていつでもOK！3時にお店は入れればいいんだから。

「ランチいいですね。いつでも誘ってください。では、おやすみなさい。」

これでどうだ！

「OKです。明日メールしますね。おやすみなさい」

いい感じじゃないの、これって！あ〜早く明日が来ないかな？って日変わってるし、

早く寝て起きようって。

何とも幸せ。いつまでもこうだといいのになあ〜

## デートの約束

デートの約束

今日の目覚めは最高でした。

人って単純よね、まさかのチャーリーの出現に昨夜は一喜一憂！

チャーリーばかりに気を取られたけど、村田さんにはちゃんとお礼を言わないと。

何たって村田さんが居なければチャーリーとの再会は無かったんだから！

お礼のメールを一生懸命考えて送りました。

あっ！メール！村田さんから。

「昨日はありがとう、まさか健太がチャーリーだったなんて驚きです。いい奴なので仲良くしてやってください。また、お店に寄せてもらいます。」

追伸、美佐さんってどんな人ですか？食事に行く事になったんですが、かなり強引な人ですね。」

いや〜、いい人だなあ。美佐の毒牙にかからない事を切に願います。

続いてメール！チャーリーから！

「おはよう、早速ですが今度の日曜日空いてますか？本屋巡りしま

せんか？ご飯ご馳走しますから。」

よっしゃ！来たよ、来たね！いい感じじゃない？これって脈ありなんじゃないの？

早速返信しなくては、もったいぶってる場合ではない。

「OKですよ。私も探してる本があるのでよろしくです。お時間は山下さんに合わせますから決めてくださいね。楽しみにしてます。結構食べますよ！私は……」

チャリーはすぐに返信してくれて、日曜日の11時、場所は夙川駅で待ち合わせする事になった。夙川とは何となく洒落てるよね。

しかし、浮かれてる場合ではない。本当にカクテルコンペの締め切りが迫っているので早く、レシピ決めないとマスターに怒られる。

私がチャレンジするコンペは毎年行われる、全国技能競技大会の予選！支部予選と関西予選を抜けると全国大会に出場できる。

フルーツ部門と課題部門と創作部門の3部門で行われ、その総合点の上位2名が次のステージにすすめる！

私は今回が3回目のチャレンジ！過去2回は5位4位で予選敗退ではありますが、着実に上がってきている。今年は予選突破に向けて頑張らねば。

恋も大切だけど仕事もコンペも大事です。

吉沢はやみ 29歳 頑張ります。

## カクテル

### カクテル

いつもは午後4時くらいに出勤して、お店の準備をするのんだけど、コンペが近づくと午後1時か2時には入って練習します。

私が出るのは本選と呼ばれるクラスで、フルーツ、課題、創作の3部門で争われる。

フルーツ部門はりんご、オレンジ、キューイが各1個、パインが1/4カットを規定のお皿に10分以内に盛る。

包丁の扱いやデザインなど、かなり難しい！私も一番の苦手部門。

毎日必ず、フルーツを切るようにしている。

課題部門はお題のカクテルを5分以内で5杯調整する。一切のメジャーカップを使わずに

ハンドメジャーと言う目分量で作る。大体がシェーク物ではなくステアで作るカクテルが多い。

今回は「マティーニ」です。美味しいカクテルを作ると言うより、いかに決められた分量で正確に作れるかがポイント！

最後に創作部門はその名の通りで、いわゆる、オリジナルカクテル！これは、6分以内に5杯調整。

フルーツや課題は前もって練習はいくらでも出来るんだけど、創作はカクテルを作るのに一苦勞です。

ネーミングと味と見た目が一致して初めて評価される。なかなか難しいです。

ある程度出来上がった段階でマスターに見てもらって、いわゆる稽古をつけてもらって感じです。

今回、私の構想は白いカクテル。アルコール感がありながらやさしい甘さが広がる、そんなカクテルを創作中です。

「おはようございます。」

おっ！もうそんな時間。アルバイトの前田くんがやってきた。

「姉さん練習ですか？」

「ちょっとだけ、練習つきあって？」

私は前田くんにストップウォッチを渡してタイムを計ってもらって事にした。

フルーツの練習、パイナップルから切り始める。時間は1分から1分10秒が目安。

三十秒事にコールしてもらって。

次にオレンジ、これは2分〜3分。ここからが難関りんご！一番細

工がしやすいけど、以外と時間を食う事がある。

3分〜4分！ここまでで最大かかって8分に抑えないと最後のキューイでタイムオーバーしてしまいます。

キューイは1分！パターンを幾つか考えてないと最後の時間調整が出来ない。

出来上がりと同時にタイムを聞いた。

「9分48秒です。」

ギリギリ！練習では9分切る位でないと安心できない。まだまだ練習です。

「姉さん、だんだん美味くなってますね。」

「サンキュウ。フルーツ食べていいよ」

毎日フルーツを切るのでこの時期のご飯はフルーツで終わることも多い！それでも余る時はゼリーにしてみたり、コンポートにしたりしてこっちも大変！

比較的のうちのお客様はコンペに理解があって応援してくれるのでフルーツ切らせてもらったり、マティーニ5杯作らせてもらったりしている。

結構辛くて大変だけど、これは絶対に自分の身になるからとマスターは言うのでがんばっています。



もしもチャーリーが応援に来てくれたりしたら、めっちゃ頑張っちゃうけどなあ？

日曜のデートを励みに練習やらなくっちゃ！

美佐と村田さん

美佐と村田さん

美佐と村田さん

毎日からず1回はチャリーとメールをしている。何だか楽しい！  
これって女の喜びよね、最近肌の色艶もいいような気がする。恋の  
パワーは恐るべし！

今日は金曜日、あと2日でデートなんてどうしよう。

「ヨッシー！カクテル出来た？」

げげえ、人の幸せムードを潰すマスターの一言！

「もう、少しです・・・」

マスターからのお小言をもらってちょっぴり反省。

「いらっしやませー！」

入って来たのは、美佐と村田さんでした。

そう言や金曜日にデートだと言ってたなあ。

「あら、どこか行つてたの？」

知らない振りして聞いてみた。て、言うか美佐の格好は相当気合が入ってる。

女の色気ムンムンって感じで、胸元けっこう開けてアピール全快！あんたの乳がデカイのはわかってるよ。

「村田さんとデート、おいしいイタリアンをごちそうになっちゃた。」

何だかムカつくよね、この女。

「美佐さんが強引で・・・」

「すみません、村田さん。この女がご迷惑かけて。」

美佐はグラスシャンパンをオーダーして、雰囲気づくり満開で私に喋りかけないでって感じのオーラだしまくり。

私は他のお客様をお相手しながら、美佐たちの様子を伺っていた。

何だか、村田さんに寄り添う感じで、それとなく身体に触れる。お前はクラブのホステスか！

「マスター、ちょっと村田さん助けた方がよくないですか？」

「何や、ヨッシー焼き持ちか？二股はあかんで！」

何言ってるのマスターは！美佐の毒牙にかけるにはあまりに村田さ

んはいい人だから。

と言うか、村田さんを狙ってるのに、大好きなマスターがちゃちゃ入れたら、どんな風になるのかちょっと見てみてかった。

マスターは楽しい人だから、必ずあそこに参入するはず。

美佐はフェロモンムンムンで村田さんにアピールしている所にマスター参入！

「何、美佐ちゃんいい感じじゃないの。村田君狙いか？」

マスターの参入に村田さんの表情がほっとした様子に見えた。

「マスターって意地悪！」

美佐が困惑した表情でマスターを見た。だいたい人の恋の話に横から入ってきていい思いしようなんて甘い甘い。

美佐と村田さんの会話に徹底的に入り込んで邪魔しまくり、村田さんの気の有る会話があると、マスターの攻撃が入り、マスターを捨てがたい美佐は困りはてている。

昔の人はよく言ったものだ、二兎追うものは一兎も得ずだね！

「いや、マスターってほんまに面白いですね。」

村田さんはうちのお店を十分に楽しんでるようだったが、美佐はうまく行かなくて微妙な顔をしていた。

私とチャーリーは絶対知り合いの所なんて行かないから！

帰り際に美佐が耳元で、「あんただけ幸せにはしないわよ」って

ハハハ。今日のあなたは完敗よ！おとなしく帰って一人で寝なさい。

村田さんはそんな簡単じゃないわよ。

「マスター、ナイスでしたね。」

「ちょっとやりすぎたかな？美佐ちゃん本気だったかもしれへんし？」

大丈夫、大丈夫。あの女がそんな事でへこむわけないって。

とりあえず後でメールしてみよっと。美佐の反応が楽しみです。

## シンセーロ

### シンセーロ

土曜日の営業は以外と遅くなってしまった。

家に着いたのが、午前5時。さくつと化粧落として即寝しようと思つたのに興奮しているのか、まったく寝れなかった！

いつもはパンツが多くて、スカートなんてあまりもってない。セミナー用のスーツかパティーがあつた時にマスターに買ってもらったドレスぐらいしかない。

まさかそんな決めていたら確実に引かれちゃう。

悩みに悩んで、ちょこつと大人な感じのパンツにしてみた。

待ち合わせ時間の前に行くか遅れて行くのか、色々考えてみたけれど、うちのマスターは時間にうるさくて時間前に行く事がカラダにしみついてるみたいで、気が付けば待ち合わせの夙川駅に着いていた。

8月も終わりだと言うのにまだまだ暑い。駅で待っていると汗が止まらない。

駅構内にあるスーパーに入って少し涼む事にした。

待ち合わせ時間の30分も前についてしまつて、どうしよう？

場所柄、お洒落な輸入食材がいっぱいあったので、それを色々見ながら時間を潰した。

ふと外を見るとチャーリーが電車から降りてくるのが見えたので慌てて表に出た。

「おはよう。待ちました？」

「いいえ、今きたところです」

チャーリーはメンパンに薄い黄色のシャツを着ていた。

何てさわやかなのかしら、感動しちゃう。

「とりあえず梅田にいきましょうか？」

「そうですね。エスコートお願いします。」

梅田までの間、おすすめの本の話で盛り上がり、楽しく時間は過ぎた。

とりあえず、大きな本屋を何軒かハシゴして、色々のジャンルの本も見て回った。

たまに本に熱中して私の事を完全に忘れられる時もあったりして、チャーリーって本当に

本が好きみたい。

私も今度の予選のカクテルのネーミングの参考になる本を探して回った。

午後2時を回った頃、チャーリーがすまなそうに私のところに来た。

「ごめんなさい、すっかり昼ごはん忘れてました。」

「全然、大丈夫ですよ。」

チャーリーとぶらぶら歩きながら、福島駅の近くホテルで遅い昼飯を食べた。

「吉沢さんも本詳しいですね。」

「マスターが小説よく読むので、それ借りるんです。」

「マスターも話し合いそうやね。」

「山下さん！ヨッシーでいいですよ。みんなそうですから。」

「じゃあ、そうします。ヨッシーも山下さんって！チャーリーでいいよ。」

笑顔で言ってくれたチャーリーにもうとろけそう。

本当にやさしく接してくれるチャーリーとの時間は楽しかった。

ご飯の後、福島の商店街にある小さな古本屋に連れってってもらった。

古い小さなお店に雑然と本が並んでる。チャーリーはお店のおじさんに挨拶して、物色している。



しかし、驚くほど色んな種類の本がある、私は写真集のコーナーで一冊の本を見つけた。

白地にオレンジ色で『シンセーロ』と書いてある。

中を開けてみると、満面の笑みの子供達の写真が並んでいた。色々な国の子供達が本当に心から笑って感じがした。

私はその本に引き込まれていたので、横にチャーリーが着ていた事さえ気づかなかった。

「気に入ったの？」

「えっ！あつ、すごく自然な笑顔で引き込まれちゃいました。」

「シンセーロ、親愛なるって意味かな？ポルトガル語だと思うけど？」

『親愛なるか』、何だか引かれる。

「プレゼントしますよ。今日付き合ってもらったお礼に。」

「いいですよ、今日は私がお願いしたんですから。」

チャーリーはその本を持ってレジ向かっていた。

結構強引なんだから！でも、うれしいかも。

『シンセーロ』と言う言葉に惹かれたのか、子供達の笑顔に惹かれたのかはわからないけど、本当に気に入ってしまった。

いいカクテルが出来そうな予感もしていた。チャーリーとの出会いは偶然だけである意味必然だったのかもしれない。

思い入れ

思い入れ

コンペに出すカクテルも決まった。チャーリーとのデートは有意義で、色んな意味でリフレッシュ出来た。

あれだけ悩んでいたカクテルもあれから、あっという間に出来上がり、自分でも納得の出来！

今日はそれをマスターに見てもらおう。

「おはよう。」

「おはようございます。よろしくお願いします。」

カクテルを見てもらおう為にいつもより早くにお店に来てもらった。

「創作カクテル見てもらっていいですか？」

そう言っつて私はカクテルを作り始めた。

プレミアムウオッカに洋ナシのリキュールとライムジュースを加えた。

気持ちを込めてシェークした。

デコレーションには、レモンピールで作ったピースマークにオレンジピールで作ったハートをつけて物

「おねがいします。」

マスターはじっくり色合いを見たあと、香りを嗅ぎ、味わいを見た。

「ネーミングは？」

「シンセーロです。」

「意味は？」

「親愛なると言う意味です。」

マスターは真剣な表情でじっくりカクテルを見ていた。

「なかなかええんとちゃうか、ネーミングもええとは思うけど、ヨッシーの思い入れが強すぎて、それが伝わらなきゃ意味ないで。」

なかなかきびしい意見だ。

「デコレももっと考えなあかな、レシピとネーミングはこれでええけど、もっと練りこまな勝たれへんで。」

「はい、頑張ります。」

マスターからは一応OKをもらった。これからは、練習も本番！より努力しなくては。

チャーリーに行ったきりにならない様に自分に自制しなくては。

大会まではこれに一生懸命になっていく事が全てうまく行くと信じてやりぬくしかない。

「ところでヨッシー、シンセーロって何処で見つけたの？」

「この間、写真集につけたんです。シンセーロって言うタイトルの」

私はマスターに写真集を手渡した。

「なるほど、こう言うイメージね。」

マスターも食い入るように写真集に見入っていた。

子供達の笑顔が大人も元気にしてくれると私は思ってる。そんな力クテルが作ればいいのにと真剣に思う今日この頃です。

コンペまで2ヶ月。それが全てではないけど、それはとっても重要な事。

技術を磨く私にとっても、応援してくれるお客様にとっても。

## 疑惑

### 疑惑

うちのお店の口開けは大体が西さんです。

今日はビールスタートで早くも3杯目のアイリッシュウイスキーを飲んでいきます。

「大会のカクテルは出来たんかいな？」

「ばっちりです！マスターのGOサインもできましたよ」

「何ベースや」

「ウォッカです。洋ナシのリキュール使ったカクテルです。」

「もう、飲めるんか？」

「もちろんです。」

西さんはカクテルをオーダーしてくれた。

「ん〜、なかなか美味しいで。」

「ありがとうございます。」

「今回は優勝せなあかんからな！」

「がんばります・・・」

この時期になるとお客様の応援はありがたいのですが、かなりプレッシャーかけられる

「ところで、チャーリーとはどうなんや。」

まあ、順調ですって感じで西さんに報告しました。なんせ、西さんが経由で村田さんが来て、そこからチャーリーに繋がった訳だから、うそはつけません。

「そうか、いやな村田君のつれやからてつきり・・・」

「なんですか、その意味ありげな言い方は」

何だか口ごもった西さん

そんな話をしていると高島君が入って来た。

「ちいゝす、ハイボールください。」

「どないや、高島君元気かい」

「西さん、相変わらずですよ。ヨッシーはチャーリーとか言っわからん奴に取られるし、美佐ちゃんも村田さんにもっていかれそやし、最悪ですわー!」

「何や、美佐ちゃんも狙つとたんか？」

うなだれながら、高島君はグラスに口をつけた。

「何だか、ここへ来る意味が無くなってきたなあ」

「こら高島！女探しにうちに来てたんか」

マスターの言葉に必死で言い訳していた。

「まあ、ヨツシーはともかく、美佐ちゃんはたぶん大丈夫やで」

何で西さんがそんな事断言できるのか？

「あの2人あかんかったんですか？」

「ちやうちやう、村田君はゲイや！」

ええ〜！マスターも私も前田くんも高島君も一斉に西さんに詰め寄った。

「マジですか、ほんまに！」

高島君の驚きは全員の代弁となった。

「ほんまやで、あの子はカミングアウトしてるで。」

信じられない！まさかあの村田さんがゲイだったなんて。

「確かに、あの目の綺麗さはそっちぽかったなあ」

「て、事はチャーリーもやばいんちやうん」



それで、さつき西さんは口ごもった言い方したんや。

いやいや、チャーリーは違うはず。そんな訳ない。

高島君はいいネタつかんだとばかりに、元気になり、お代わりを注文した。

私の頭の中は疑惑の文字が回っていた。

ゲイが悪いとは思わないけど、万が一チャーリーがそうだったら、せつかく春が来たと思ったのに・・・

でも、これを知った美佐の顔を浮かべると何だか微笑んでします自分が怖かった。

## 自棄酒

### 自棄酒

美佐の自棄酒は午後7時すぎから続いている。今は午後11時。

まさかの村田さんのゲイ発覚にさすがの美佐もショック大！

西さんや高島君など常連さんが慰めたが、それは治まることはなさそうだった。

「何ですよ！どうしてあんないい男がゲイはわけ？」

「まあ、人には色々趣味思考があるかね。」

かおりさんと由真さんが慰めてくれているけど、まったくダメみたい。

慰めてる姉御達は言葉と裏腹に目が笑ってるのが、なんとも怖かった。

「まあ、早めにわかってよかったんじゃないの、深みにはまる前で。」

「あんたはいいいわよね、チャーリーとうまく行って。チャーリーもゲイなんじゃないの？いや、絶対ゲイだ！そうに決まってる！」

ギクツ！その話題はダメでしょう。以外と敏感な話題なんだけど。

っていうか、やつあたりすぎじゃない。

「美佐ちゃんには俺がいるじゃない。もう、そんな絡んだらあかんで」

マスターの言葉に美佐の目が輝いた。これはやばい気がするなあ。

「じゃあ、マスターエッチしようよ!」

この女、何て事を、姉御達はドン引きしてる。

マスターも危険な一言のような気がするなあ。

「美佐ちゃんがそう言うやつたら、ええよ!」

な・何!マスター!やばいって!

酔ってデロデロの美佐の目がきらきら光りだした。

今の瞬間、美佐の頭の中から村田さんは消えた!

「マスター、私たちもお願いしま〜す。」

由真さんがちゃちゃ入れてきた、でも以外と本心ぽかったけど。

「マスターのソルティードックが飲みたくい」

どっから声だしてんのよ、この女は。美佐の猫なで声はいつ聞いてもぞつとする。

「いいよ、美佐ちゃんの為に作ってあげるから、もう、自棄酒はや

めとき」

マスターはやさしい人だけど、女は勘違いする生き物なのよ。知らないから！

マスターのやさしいスナップシェークの音は店内を和ませた。

さすがに美佐も治まった感じはしたが、ある意味違う物が始まった気もした。

「で、はやみの方は本当に大丈夫なの？」

かおり姉が痛い所を突いてきた。

「たぶん・・・」

「曖昧な返事やね、大丈夫かいな」

そんな事言われての、まさか、あなたもゲイですか？なんて聞ける訳ないし・・・

「ヨッシー、ちょっと出てくるわ。あとよろしく！」

ええ、マスターが美佐を連れ出すって、まさか、やっっちゃうの？  
姉御達も私も目を丸くしながら二人を見送った。

「まさか本当にエッチしに行ったわけないよね？」

由真さんの問いにみんなは首をかしげることしか出来なかった。

私たちが困惑している中、村田さんが入ってきた。

## カミングアウト

カミングアウト

美佐と入れ替わりに村田さんが入ってきた。

姉御達も私もどうしたらいいのかちょっと迷っていた。

「こんばんは、今日はマスターは？」

「今、ちょっと出てます。」

何ともきまらずい雰囲気は店内を流れてした。

雰囲気を感じた前田君が、村田さんと野球の話をし始めた。ナイス！

私は姉御達と、気もそろろの会話をしていた。

由真さんが我慢できなくなったのか、突然、村田さんの話に割って入った。

「村田さんって本当にもてるでしょう」

「いえいえ、もてませんよ。あんまり積極的な方じゃないので」

「以外と男にもててたりして。」

いきなりの直球！由真さん、やばいって。

「そっちはもてますね。」

ええ〜！あっさり認めたの？

「僕、ゲイなんですよ。わかりませんでした？」

その場にいる全員目が飛び出るかと思うほど大きく見開いていた。

普通に自分がゲイである事を話す村田さんを、何とも不思議な感じで見ている。

こんな男前なのに、ゲイだなんてもったいない。

でも、そのあっさりさに、みんなも普通に受け入れた。

その後、姉御達は興味津々で色々な質問をしていた。私も知らない世界にどきまぎしていた。

村田さん登場で、マスターと美佐の事を忘れていた。あの二人いったい何処へ行ったのだろうか？

結局、マスターはその日、店には戻ってきませんでした。

男と女、マスターと美佐。いや〜んそんなのだめ〜！

## 不安は秋の始まり

不安な秋の始まり

夏も終わり、少し秋の装いになってくると、カクテルの出る種類が変わる。

白物のスピリッツから茶物のブランデーやウイスキーにベースが移行する。

マティーニからマンハッタンやゴットファーザーに。

あの一件以来、マスターと美佐は何か怪しいし、私もチャリーのゲイ疑惑も残ったまま。

村田さんは相変わらず来店してくれている。

私はコンペが近いので、毎日練習の日々です。

「大会のチケットキープしといてな」

西さんは毎回応援に来てくれてる。

「ちゃんと取ってますよ。高島君はどうなの？」

「もちろん、行きますよ。優勝する瞬間を見ないとね」

軽くプレッシャー掛けやがったな！



今年は、かなり良いカクテルが出来たと思ってるので、頑張りますよ。

「久しぶりに、ヨッシーにサイドカー作ってもらおうか」  
ブランデーにコアントロー、そしてレモンジュース。シェイクの腕が試される。

ブランデーの風味とレモンの酸味、そこにコアントローの甘み。甘酸味のバランスが重要なカクテルです。

「上手くなったね。マスターも喜んでるやろ」

西さんのお世辞をありがたく受け取った。マスターは褒める事などほとんどない。

まあ、そんな簡単に弟子褒めてたたら、付け上がるわね。

午後8時、久しぶりに杉田さんがきた。

「久しぶり、余市の水割りちようだい」

杉田さんは無類のニツカ好き。余市12年が特にお気にいりです。

「この間、娘にねだられて家具買いに行ったんやけど、その店がチャリーの所やったわ」

「本当ですか、どうでした？」

杉田さんは娘さんが雑誌で見つけた、チェストを買いにいったらしく、そのお店がチャリーの輸入家具のお店だったそうです。

「結構ええ店やったで、えらい良くしてもうたわ、娘も大喜びや。」  
そりゃそうでしょう。チャーリーは優しい人です。そういえば、私は一回もお店には行ってないなあ、今度行ってみよう。

「チャーリー、フランスに行くらしいな」

ええ、そうなんですか？何も聞いてないよ。

「家具の買い付けですかね。」

「少し長めに行くみたいやな」

ええ、そうなの？本当に聞いてないよ・

チャーリーとはメールで色々話してるのに、そんな事言ってなかったよ。

またしても不安。恋って不安がいっぱいね。長く行くなってどの位だろっ？

メールで聞いてみよっと。ゲイかどうかは聞けないけど、それなら簡単に聞けるよね。

本当は？

本当は？

土曜日のお昼にチャーターとランチデートをする事になった。

秋になって、少しお洒落な服装もできるかなあって、感じて洋服選んでいそいそ待ち合わせ場所に。

今日は最近、雑誌で取り上げられる事の多い洋食屋さん。

「お待たせしました。」

いつもながらに、さわやかなチャーター。

「今来たところです。」

二人でトリアロードを歩きながら、色々近況報告。メールではお話しているけど、やっぱり会ってのお話は楽しい。

「この間、うちのお客様の杉田さんが、お店行ったみたいですね。」

「いらつしゃいましたよ。フランス製のチェストを買われていきましたよ。」

杉田さんの買ったチェストは、ここ数年ヨーロッパで人気の家具メーカーの物だそうです。

色々と家具の事とか、フランスの話とかいっぱいしてくれました。

お店では、話題の神戸牛を使ったコロッケのランチを食べました。

「いいお店ですね。コロッケもおいし〜い。」

「本当に、旨いですね。それに、いい内装です。村田にも教えてやらないと」

チャンスかもしれない。ここで、村田さんのゲイの話を降って、様子をつかってみよう。

「あ、そうそう、村田さんって、ゲイなんですって？」

「ご存知でした。あいつ、高校の時にいきなりカミングアウトしたんですよ。その時は驚きました。」

チャーリーはまったく普通に答えた。

「村田さん狙いの美佐は、相当荒れてましたよ。これまた、大変でした。」

「そりゃ、驚くよね。美佐さんの気持ちもわかります。あいつ男前だから、今までもあるんですよ。女の子が惚れちゃって色々だね」

「まさか、チャーリーもだったりして・・・」

ナイスなタイミングで聞けた気がした。果たして、結果は。

「冗談きついな、ヨッシー。僕は違いますよ。」

ふう〜、良かった。やっぱり違うじゃん！あ〜よかった。

「ですよ。冗談ですよ。ところで、フランスに行くんですか？」

「えっ！」

何で、そこで驚くかな？普通はさっきの所で驚くんじゃないの？

「杉田さんが言ってたから」

「あっ、うん・・・、来月からね」

「長く行くて聞いたから、2週間くらいですか？」

「もうちょっと長めなんですけど・・・」

「一ヶ月ですか？いいですね。買い付けですね」

チャーリーの口ごもった言い方が気になったけど、ゲイ疑惑も晴れたし、コロッケ美味しいし、今日のランチは最高です。

好きな人と一緒に居れるって、本当に最高。季節は秋だけど、29歳崖っぷちの私に、春が来たって感じですよ。

そろそろ、告白とか考えちゃおうかな。いやいや、コンペが終わるまではおあずけ、おあずけ。

## 秋晴れはいつまで

本当の事

コンペまで二週間を切ってしまった。練習はしているけど、不安はいっぱい。

チャーリーのゲイ疑惑も晴れて、私はコンペ後に告白するだけ。向こうから告白されたらどうしよう。

午後9時に村田さんが西さんとやって来た。

「食事後だから、俺はアレキサンダー、村田君はどうする」

「ブランデーストレートでもらいます。」

秋になって、少し濃い甘めのカクテルが出るようになりました。

ブランデーにカカオに生クリーム、少し強めにシェークして混ぜ合わせます。

「うまいね、練習の成果かな？」

西さんは村田さんとお仕事の話みたいで、真剣ムード。

マスターがお客様に頂いた、チーズをお出しするように言われたので、私は準備して、西さん達にお出しした。

「もらい物ですけど、フランスから買ってきたカマンベールです。」

よかつたら」

「むごうの奴は美味いですよね。頂きます。」

村田さんが美味しそうに食べてくれた。

「健太がうらやましいなあ、これから毎日こんな美味しいチーズが食べられるんだから」

「何、チャーリーはフランス行くんか？」

そうです、チャーリーは家具の買い付けに一ヶ月行くんです。

「ええ、今月の半ばから一年間行くんですよ」

一年？

西さんに話す、村田さんの話しは私を啞然とさせた。

家具の買い付けと、美術の勉強の為に、約1年いくとの事だった。

私はそこまで聞いていない。何だか淋しい気持ちがこみ上げてきた。

「吉沢さん聞いてなかったの？」

「フランス行くのは、聞いてましたけど、一ヶ月くらいだと思ってました。」

明らかに落ち込んだ私を見て、村田さんも西さんも必死でフォローしてくれた。

「あいつ、以外と天然だから、言ってるつもりになってるんじゃないかな？」

「そうそう、コンペ前だし、気をつかったんかもしれんは」

二人ともありがとうございます。

「あとで、メールしてみます。」

どうして、チャーリーは言ってくれなかったんだろう？

私は、そんな事言わなくてもいい関係の人間なのかな？

一年は短いようで、長い時間だなあ。



## 告白と告白

### 告白と告白

あの話を聞いて以来、苦悩の日々。メールの返信はないし、悲しい。お店の営業はいつも通りに進んでいく。いつものお客様とカクテルと会話。

楽しい時間のはずなのに・・・

午後11時、チャーリーがやってきた。

「ウオツカリツキーください。」

チャーリーは何か思いつめた感じだった。

「ヨッシー、ちゃんと話してきなさい。」

マスターに言われて、チャーリーの前に

「あの、ごめんなさい。ずっと黙ってて

「淋しかったです。本当」

「ずっと言おうと思ってたんです、でも、言い出せなくて

「いつから、行くんですか？」

「10月14日から1年の予定です。」

14日ってコンペの日じゃない。

沈黙がつづいて、私は思い切ることにした。

「私は、あなたが好きです。一目惚れから始まって、仲良くなってこれからもっと知り合えたらと思っていました。」

「僕も好きです。何回か会って、本当にいい人だと思って惹かれました。」

お互いの告白は決して感動的なものではなかった。

「今の時期に一年もフランスに行くなんて言えませんでした」

「言うてくださいよ。待てるかどうかはわからないけど」

「ごめんなさい。一年行つてきます。待つてください。」

「それはわかりません。お互いの努力しだいでしょう」

最初からそう言うてくれればいいのに、私はチャリーが好き、そしてあなたは私が好き

普通は一件落着でしょう。

でも、何もこの時期に一年もフランスに行かなくてもいいのに。

「じゃあ、今日は私のマティーニ飲んでください。」

「はい、喜んで。」

カクテルの中では、アルコール度数も高くきつい。でも、ジンとベルモットの香りが甘い。

今の私の気持ちにぴったりにです。

時間は、午前零時

最高のマティーニをチャーリーに。

「きついね。」

「当たり前です。マティーニですから」

チャーリーはじっくり味わって飲んでくれた。

「14日はコンペなので、見送りはいけませんから」

「ごっちこそ、応援いけなくてごめん」

「フランス行ったことないので、マスターにつれていってもらいます」

「是非、来てください。案内しますから」

「その二人、盛り上がるのはいいけど、何で俺が連れていかなあかんかな」

マスターがようやく、話に入ってきてくれた。

人生の先輩として、マスターは二人に喝をいれた。

恋愛に溺れる奴は使えないというのが、マスターの持論。

私も女性バーテンダーとして、一番気をつけていたのに、反省です。

一目惚れから始まった、恋は一応の決着となった訳です。

恋とは、そんなに全てが上手く行くものではないですね。

念願の彼氏は、フランスに一年も行ってします。

あゝ、上手くいかなね。

## 旅立ちに乾杯

旅立ちに乾杯

チャーリーとの関係は新たな一步を踏み出した。

恋人同士の様で、そうでもない。1年も遠距離だし、まだ手すら繋いだことが無い。

でも、お互いの気持ちは確認できたし、あとは、野となれ山となれって感じです。

だって、若いカップルじゃないから。

カクテルコンペ当日に出発！最悪なチャーリーです。

お別れは昨日お店でした。コンペの壮行会をお客様がやってくださって、楽しくさよならできました。

さてさて、いよいよコンペです。準備は万端です。たぶん？

練習はいっぱいしたし、今回の創作には自信あります。

朝8時に会場集合して、準備です。

マスターは、思いつきり自分らしくやりなさい。と一言だけのアドバイス。

「ヨッシー、緊張してる？」

「智さん、おはようございます。今日はよろしく申し上げます。」

今回、智さんは選手係りとして、私達のお世話をしてくれます。

「マスターが、今年はいい出来だ。って言ってわよ」

「頑張ります」

やっぱり緊張するものなのですが、こうやって先輩からの言葉で救われる気がした。

午前10時よりフルーツ競技開始。私はゼッケン番号5番。3人打ちの2クルー目

タイムキーパーの合図で競技が始まった。

練習通り、焦らずしっかりやっていく、リズムに乗って。

「5分経過」

タイムコールで、今日は上手く行っていると確信した。

「残り2分です。」

ほぼ、出来上がった。余裕が有る分しっかり確認して、終了した。

まずは、一部門。チャーリーは今頃、空港に向かっている頃だろうか？

昼ごはんの時間を挟んで、いよいよ、お客様の前での課題部門と創作部門の開始。

うちの常連さんたちは、大勢来てくれてるはずです。緊張してきた。

控え室で、課題の「マティーニ」を作るイメージトレーニングをしていた。

メールが着た。

「空港到着。緊張してる？結果が出る頃には、僕は空の上です。いい結果を期待してます。ヨッシー頑張れ！」  
「チャーリー」

私はそつと携帯を抱きしめた。

課題競技は、自分としては完璧にできた。分量はバッチリだったし、演技も満足いくものだった。

緊張の中でも余裕があったのか、客席のみんなの顔がよく見えた。西さんに、杉さん、川端さん、高島君に姉御達、そして、村田さんに美佐。

課題が終わるとすぐに、創作の準備。デコレーションの用意をして、最後の演技の為に集中していた。

創作カクテルは、チャーリーと本屋巡りをした時に見つけた写真集から取った「シンセーロ」

私の思いを乗せたカクテル。

「4番と5番の選手、準備おねがいします」

今のところの得点がどうなっているかは、私にはわからない。でも、最後まで一生懸命やるだけです。

競技時間は6分間、グラスをしっかりチルドして、シェーカーに材料を入れる。

プレミアムウオッカ、ポアールリキュール、ライムジュース、グレイプフルーツジュース

5杯取りの大きいシェーカーをスナップを効かせて、ダイナミックに振る。

ゆっくりやさしく5個のカクテルグラスに注ぎ、ピースマークにハートを付けたデコレーションを付ける。

最後に、5杯を一行に並べて終了。

「シンセーロ」親愛なると言う名前のカクテル。

この二ヶ月、色んな事がありました。電車での一目惚れから始まった恋。

それに伴って起こった色々な出来事。

落ち込み、有頂天になり、困惑し、恋愛のパワーは相当なものでした。

29歳で久しぶりの恋。



幸せです。たとえあなたが一年いなくても、ねえ、チャーリー。

私、女性バーテンダー。恋愛には溺れません。お客様を私のカクテルに溺れさします。

あなたを待つ間に、私はきつと一回りも二回りも大きく成長してみせます。きつと驚くわよ、チャーリー。

雲を掴む様な話を掴んだ私は、今度は夢を掴みます。

「今年度、総合一位は、ゼツケン番号5番、吉沢はやみさん」

チャーリー大好きです。あなたを待っています。

きつと、お店でカクテル作りながら・・・

午前零時のマティーニは強くて美味しい。きつとあなたをぐっすり眠らせる事でしょう。

また、お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6554c/>

---

午前零時のマティーニ

2010年10月10日14時21分発行